

一般言語学におけるヴォイスについて

Voice in general linguistics.

崔 昌玉

Choi Chang Ok

要旨 ヴォイスは、意味論的に動作の主体と動作の客体の見方の相違が文の命題に反映されるものと定義されてきた。例えば、能動態では、動作の主体から動作の客体に向かう一連の動作が描かれ、認知言語的に動作の主体が前景化されているが一方、受動態では、その一連の動作が、動作の客体が動作の主体に動作を被るという点で反転し、認知言語的に動作の客体が前景化される。また、非使役態でも、典型的には、動作の主体から動作の客体に向かう一連の動作が描かれている。一方、使役態では、被使役者(causee)が現れ、使役者(causer)が、被使役者を通じて動作を行わせるという動作を表している。さらに、言語類型論における様々な考察から、ヴォイスには、自動、他動、中動、反受動等々があるということも指摘されてきた。本稿では、これらの術語を概略的に整理するものである。それに加えて、本稿では、ヴォイスと関わる他の範疇との関わりについても、言及することにする。

1. 本稿の目的

本稿の目的は、一般言語学において、ヴォイスがどのように規定されているかを概観することである。また、本稿では、一般言語学において、ヴォイスと関わる他の範疇がどのように記述されてきたかについても概観することにする。本稿の内容は、次の通りである。まず、一般言語学におけるヴォイスの規定を、Trask(1993)を通じて、確認する。次に、Shibatani(1976, 1985), Khrakovskij(1979), Perlmutter&Rosen(1984), Klaiman(1991), Givón(1994)を通じて、それぞれのヴォイス理論を簡単に概観する。最後に、一般言語学において、ヴォイスと関わる他の範疇がどのように研究され、記述されてきたかを簡単に概観する。

2. 0. 一般言語学におけるヴォイス

まず、Trask(1993)を通じて、一般言語学におけるヴォイスの規定を確認することにしよう¹。Trask(1993:299)では、ヴォイスを次のように規定している。

一方では、動詞の名詞句項の関与者役割と、他方では、それら同じ名詞句によって生み出される文法間関係の間の関係を表現する、文法範疇である。ヨーロッパ諸語で、もっとも慣れ親しんだヴォイス対立が能動構文と受動構文の間のそれである。‘*Lisa wrote this paper.*’のような能動構文では、文法主語が動作主を典型的に表現し、直接目的語

が受動者を典型的に表現する。‘*This paper was written by Lisa.*’のような対応する受動構文では、その主語が典型的に受動者であり、かりに明示されるのであれば、斜格の目的語が動作主である。ヴォイスの他の範疇として、2, 3例をあげると、幾つかの言語には、中動、再帰、使役そして *adjutative*²がある。

Trask(1993:299)から、受動態に議論を限定すれば、文法範疇としてのヴォイスにおいて、能動文と受動文における主語と目的語、そしてそれ以外がどのように位置づけられるかという統辞論的關係と、能動文と受動文における動作主と受動主がどのように表されるかという意味論的關係が、受動態を考察する上で、重要な位置を占めているといえることができる。これらの関係だけでなく、形態論的關係も、受動態を概観し、記述するためには、重要な位置を占めることも、先行研究で、何度も言及されてきている。この形態論的關係としては、例えば、現代英語では、規則変化動詞における ‘*to chase:to be chased*’ のような形態論的対立、現代日本語では、‘*追う:追われる*’ のような形態論的対立、現代朝鮮語では、‘*쫓는다:쫓긴다*’ のような形態論的対立³が例として挙げられるだろう。各言語における形態論的關係をも規定の対象に入れることになれば、一般言語学におけるヴォイスの規定がより具体的なものになってしまう。厳密な定義の中で、一般言語学におけるヴォイスを規定してしまえば、逆にその定義に合わないヴォイスも世界の言語にないとは限らないだろう。このために、Trask(1993:299)では、形態論を度外視した、統辞論的、意味論的観点からヴォイスを定義しているのである。しかしながら、文法範疇としてのヴォイスは、形態論的観点からしか規定できないという伝統的な見解もある。

ここで、能動態、受動態、使役態、中動態という文法範疇、能動形、受身形、使役形、中動形という形態論的關係、能動文、受動文、使役文、中動文という統辞論的關係は、厳密に区別されなければ、ならない。態というのは、あくまでも、文法範疇そのものを示す。そして、それは意味論的な観点から規定され、例えば、受動態であれば、動作の主体から動作の客体に向かうという一連の動作が、動作の客体が動作の主体に動作を被るという点で反転していることを意味する。その受動態が動詞に反映されれば、その動詞は受身形として、その受動態が文に反映されれば、その文は受動文として認められるのである。

更に、文法範疇としてのヴォイスにおいて、その下位分類として、しばしば言及されてきた、能動態、受動態、使役態、中動態等々を様々な観点から考察し、改めて、再定義する必要があると思われる。というのは、先行研究において、これらの下位分類が厳密に定義されていないため、かなり曖昧な議論が展開されてきたからである。

まず、能動態から概観することにする⁴。能動態は、受動態だけでなく、使役態にも、そして中動態にも対立する。能動態が反映される動詞は、主に他動詞であるが、現代日本語のように、自動詞においても能動態が観察される言語もある。つまり、現代日本語のような例外を除いて、意味論的な役割である動作の主体と動作の客体をとる他動詞(二項動詞)が典型的な動詞である。動作の主体と動作の客体は、それぞれ、文の主語と目的語になり

得る。ヨーロッパ諸語のような屈折言語では、名詞の屈折によって、文の主語や文の目的語が標示されるが一方、現代朝鮮語や現代日本語のような膠着言語では、名詞に助詞やそれに相当する副助詞をつけることによって、文の主語や文の目的語が標示される。また、ヨーロッパ諸語や現代朝鮮語、現代日本語とは異なり、いわゆる能格＝絶対格言語において、自動詞文では、動作の主体が絶対格で標示されるが一方、他動詞文では、動作の主体が能格、動作の客体が絶対格で標示される。この他動詞文が受動化されるのを、一般言語学において、反受動(antipassive)と呼んでいる。本稿では、能格＝絶対格言語においても、能動態が存在するものと見做し、議論を進めることにする。更に、Trask(1993:5)では、動作の主体の動作主性(agentivity)によって、自動詞と他動詞を区分する、活格言語(active language)も存在するとしている。

次に受動態であるが、これを文に反映した受動文では、能動文と異なり、主要成分である項が1つなくなる⁵。ただし、現代日本語における間接受動文、いわゆる被害の受動文は、1つ項が増えるのである。動作の客体が主語の位置に昇格し、動作の主体が主語の位置から降格することによって、主語や目的語以外の文の成分になる。これが典型的な受動文である。

一方、使役態において、これを文に反映した使役文では、受動文とは異なり、項が1つ増えるのである。それ故、使役文には、2つ以上の項を持つ動詞が存在することになる。一般言語学では、動作の主体である使役主(causer)が文の主語の位置に置かれ、それ以外に、使役文には、動作の客体と動作の客体に動作を直接的に行う被使役主(causee)が存在することになる。使役文において成り立つ意味は、使役主の制御可能性(controlability)によって、許可、命令、譲歩等々に解釈することができる。

最後に、中動態であるが、これは、古典ギリシア語、ラテン語のように、能動態、受動態そして中動態という対立の中でしか、存在することができないものと思われる。つまり、厳密に言えば、現代英語や現代朝鮮語における‘This book is sells well/이 책은 잘 팔린다(この本はよく売れる).’のような文は、中動文ではないのである。また、中動態は、亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996:926)によれば、動詞の表わす行為が行為者自身に及ぶ場合にとる形態論的特徴であるとされ、そのような点で再帰(reflexive)と共通するので、それと混同されて、中動態が使用されることが頻繁にある。また、相互(reciprocal)も、中動動詞の中で、相互の意味を持つ動詞があるために、中動態と混同されて、使用されることがある。あくまでも、中動態は、能動態や受動態の対立の中に存在し、それが反映された動詞は、中動動詞、その動詞が文に存在すれば、その文は中動文になる。一方、再帰と相互は、中動態と同次元で取り扱うことができず、それぞれが中動態の下位分類であると思われる。それぞれの意味を表す動詞は、再帰動詞、相互動詞であり、それぞれの動詞が存在する文は、再帰文、相互文である。中動文において、それが再帰や相互の意味を持つのであれば、二項動詞であると言い得る。Khrakovskij(1979:305-307)では、指示対象(referent)という概念を導入すれば、再帰と相互を容易に区別することができるとしてい

る。

今までの議論を整理すると、次のような図を示すことができるだろう。

文法範疇	能動態	受動態	使役態	中動態
意味レベル	動作の主体が動作の客体に動作を行うことを意味する。あるいは、現代日本語のように、動作の主体が動作を行うことを意味する。	動作の客体が動作の主体に動作を被ることを意味する。	使役主が被使役主をして動作の客体に動作を行うようにさせることを意味する。	動作が動作の主体自身に及ぶことを意味する。あるいは、動作が動作の主体と動作の客体に均等に割り当てられることを意味する。
動詞レベル	能動動詞(自動詞[現代日本語], 他動詞)	受身形	使役形	中動動詞(下位分類として、再帰動詞, 相互動詞がある。)
	二項動詞あるいは一項動詞[現代日本語]	一項動詞あるいは二項動詞	二項動詞以上	二項動詞
文レベル	能動文(=自動詞文[現代日本語], 他動詞文)	受動文	使役文	中動文(下位分類として、再帰文, 相互文がある。)

図 1. 能動態, 受動態, 使役態, 中動態の相違

ヴォイスを取り扱った先行研究において、意味論的役割は、客観性が乏しい、曖昧な議論の筆頭にあると言い得る。多くの先行研究において、動作の主体や動作の客体という意味論的役割が、ヴォイスを考察する上で、重要な位置を占めることが、言及されてきた。ただし、意味論的役割の規定は、研究者がいるほどに、その数が異なり、その数が多ければ、多いほど、客観性を欠くという欠点も指摘されている。

ここでは、Geniušienė(1987:39-42)における意味論的役割はどのように規定されているかを簡単に概観することにする⁶。

Geniušienė(1987)は、世界における言語の再帰文をある一定の規定を設けて、類型化し、記述したものである。Geniušienė(1987:39-42)では、意味論的役割は、再帰文だけでなく、ヴォイスを考察する上で、重要な位置を占めることを、何度となく、言及した後、再帰文に最低限、必要である意味論的役割を次のように提示している。

- (1) 意味論的主体(subject): 意味論的主体は基本動詞によって示される状況において最も卓立的な関与者に割り当てられる超役割(hyper-role)であり、非再帰文において表層の主語によって典型的に表現される。それは次のような語彙的に決定された意味論的役割を包括する。
- (a) 動作主(agent): 受動者を含む因果関係のある状況において、過程あるいは状態のやる気(willing)のある使役者。
 - (b) 行為者(actor): 活動と移動という自動詞の動作動詞によって示される状況において、関与者だけの役割(*John worked, John ran*)そして体の一部の移動という他動詞によって示される状況において、主の関与者の役割(*John(行為者) raised his hand*)。
 - (c) 使役者(causer): 次のように、動作主と代置し得る(受動者を含む)因果関係のある状況における主の役割。 *John(動作主) / The wind(使役者) opened the door*. 使役者は(自然の)力として時折、言及されるが、本稿では、全く何でもない、必ずしも自然現象であるとは限らない使役者がより中立的な術語として好まれる(*The pig (fell from the balcony and) killed his father*).
 - (d) 教導者(initiator): 要求あるいは命令による因果関係のある状況において誰かの動作を起こす関与者の役割。 *The captain marched the soldiers*.
 - (e) 経験者(experiencer): 精神的あるいは物理的な過程あるいは状態の意味を持つ動詞によって示される状況において、精神的あるいは物理的な過程あるいは状態を経験する関与者の役割(*John hates Mary*). バルト諸語あるいは時折、英語において、この役割が、それが幾つかの動詞における統辞論的主語と‘心理’動詞の直接目的語によって表現されるという点で特有であることが指摘される。また、心理動詞の場合、その役割が意味論的な対象物の超役割に加わる(*This worries Mary*, リトアニア語 *Tai dziugina mane* ‘That gladdens me’).
- (2) 意味論的客体(object): 意味論的客体は非派生の非再帰動詞によって示される状況における第2の重要な関与者に割り当てられる超役割であり、他動の非再帰文において表層の直接目的語によって典型的に表現される。それは次のような語彙的に決定される意味論的役割を包括する。
- (a) 受動者(patient): 動作によって影響づけられる因果関係のある状況における非使役者(例。 *John moved the stone*)と状態あるいは位置の変化を経験する実体(*The stone moved, The door opened*)あるいはある状態にある実体(リトアニア語 *Medis žaliuoja* ‘The doo opened’). それ故、この役割は過程と状態の因果関係のある異常に大きな状況と非因果関係のある異常に小さな状況を関係づける。
 - (b) 擬似受動者(quasi-patient): 行為者が動く体の一部の役割(*John raised his hand*). この役割は他動詞の動作動詞において区別される。
 - (c) 内容(content): 知覚と精神活動の動詞における第2の役割(*John hates Mary, He realized his error*).

- (3) 意味論的相手(dative) : 意味論的相手は何かを受け取ったり, 獲得したりする直接的な相手の客体の指示対象に割り当てられる超役割である. 動詞の語義的意義グループによって, 相手は次のような意味論的役割のうちの1つであり得る.
- (a) 受信人(addressee) : 語義的意義グループに典型的な3項動詞における情報(*tell the news to John*)あるいはもの(*give a book to John*)を受け取る指示対象の役割.
- (b) 受取人(recipient) : 次のように, リトアニア語とラトヴィア語の動詞である
 ‘dressing’ と ‘undressing’ における与格における客体として表層に現れる第2の人指示対象の役割(*On-a užmovė vaik-ui kels-es* ‘Ann dressed the child in pants’).
 この役割のより意味のあるラベルは ‘dressee’ であるかもしれない, というのは, それは装着動詞と共に現れるからである.
- (c) 受益者(beneficiary) : 影響づけられた, あるいはもたらされた受動者が以下のような状況において意図される所の関与者の役割(*I made a dress for Mary*). そこでは, 非再帰動詞は意味論的に2つの結合価を持つものであり, その意味論的な役割構造において受益者を含まない. (リトアニア語, ラトヴィア語, そしてロシア語において与格における付随的な間接目的語によって, 英語において前置詞 *for* によってコード化される) 受益者を持つ非再帰構造は, 動作主=受動者の因果関係のある状況(例えば, (22)におけるように, ドレスをあつらえること)と ‘意図された所有’ (例えば, ‘The dress is for Mary’)からなる, 複合した状況を示す.
- (d) 所有者あるいは全体の受動者 : 次のリトアニア語のような構造によって示される, 状況における相手の対象物の体の一部を通じて, 間接的に含まれる相手の対象物の指示対象に割り当てられる役割(*On-a šukuoja vaik-ui plauk-us* ‘Ann is combing the child’s hair’). そこでは, 意味論的な客体(*Ona šukuoja vaika* ‘Ann is combing the child’)が動作を直接的に経験する受動者(‘hair’)と所有者(‘child’)に分裂する. この種の再帰構造はリトアニア語, ラトヴィア語そしてロシア語において, かなり一般的である. つまり所有者の与格が, 直接的な対象が動作主のそれよりも体の一部に言及する場合, 義務的である.

これらの意味論的役割は, 再帰文を考察した折に, 規定されたものである. 再帰文と他動詞構文がどのように異なるのか, あるいはこの考察によって得られた規定をそのまま他動詞構文に適用できるのか, また他の言語において, ここで示された意味論的役割をそのまま適用できるのかについては, 今後の課題である. また, 現代朝鮮語のヴォイスに限定して, 言及するのであれば, 動作の主体が有情物なのか, 無情物なのか, 動けるものなのか, 動けないものなのか, あるいは意志をもって動作を貫徹するものなのか, どうかという観点も, 重要な役割を果たしているように思える. これらについての考察もまた, 今後の課題である.

先行研究では, ヴォイスという文法範疇を, 形態論的, 統辞論的, 意味論的観点から考

察したものが、主流であったが、先行研究の中には、その枠組みを超えて、語用論的、認知論的観点からヴォイスを考察したものも少なくない。例えば、後で概観するが、Klaiman(1991)やGivón(1994)は、そのような立場からヴォイスを考察した先行研究に該当すると言い得る。

以下、Shibatani(1976, 1985), Khrakovskij(1979), Perlmutter & Rosen(1984), Klaiman(1991), Givón(1994)の議論を簡単に概観することにする。

2.1. Shibatani(1976, 1985)について

Shibatani(1976, 1985)は、生成文法の方法論を取り入れながら、様々な言語の受動文と使役文を考察したものである。これらの論文において、今では、ヴォイスの議論に欠かせなくなった、ヴォイスを形態論的、統辞論的、意味論的観点から考察する利点が言及されている。結局、これらの論文では、受動文において意味論的に動作の客体が動作の主体に動作を被ることが示され、使役文において使役者が被使役者をして、動作の客体に動作を行わせることが示された。これらの論文は、ヴォイスを考察する上で、形態論的、統辞論的、意味論的観点が重要な位置を占めることを指摘した点で、大変に意義のある論文であった。ただし、このような観点を超越した、語用論的、認知論的観点を踏まえ、ヴォイスを考察した、先行研究が続々と出現しているのは、先に述べた通りである。

2.2. Khrakovskij(1979)について

レニングラード学派は、類型論的にヴォイスを記述する時、個々の言語を形態論的な観点から考察するだけでは言語における普遍性を捉えることができないと考え、統辞論的観点そして意味論的観点を含めた機能＝意味論的範疇としての diathesis を新しい理論的枠組みとして提示している。

この diathesis の理論は、まず Xolodovič(1969, 1974)で具体的な枠組みとして提出され、次に Khrakovsky(1979), Mel'čuk(1988)により再検討され、Mel'čuk(1993)によって完成されたと言える。ここでは、Khrakovsky(1979)における diathesis の定義を概観することにする。

Khrakovsky(1979:290)において、どんな文におけるどんな動詞の形式の diathesis も所与の動詞の形式の語彙素を特徴づける役割構造の諸要素の意味論的意味の複合体と、所与の動詞の形式の環境を構成する文構造の諸要素の統辞論的意味の複合体の相互関係として最も正確に定義され得ると規定されている。換言すれば、diathesis とは、形態論的な観点からだけでなく、統辞論的観点、意味論的観点からも、諸語における各々の動詞のヴォイスに関わる派生関係を記述し得る理論である。

また、Khrakovsky(1979:295, 301-302)によれば、1つの動詞にはそれ自身に内在的な意味論的役割(semantic role)の種類と量、そしてその動詞が取る名詞句の統辞論的機能の種類と量が決まっており、それらはそれぞれの機能の強さによって階層的に示すことができるとされている⁷。

ところで、Khrakovsky(1979)における動詞の意味論的役割の強さとその動詞が取る名詞

句の統辞論的機能の強さとは、例えば主体と客体という意味論的役割を比較した場合、一般の言語認識に基づいて主体は客体より機能が強いと考え、主語と目的語という統辞論的機能を比較した場合、主語が目的語より機能が強いと考えるものである。そして、その階層的に示されたものは統辞論的機能により順序づけられて、1, 2, 3……のように数字によって示される⁸。

ただし、Khrakovsky(1979:297)では、意味論的役割について、役割の一般的に受け入れられるリストはないが、ただ意味論的相違のみに基づいた役割のどんな分類も主観的であるか、詳しすぎるのが判明すると注意した上で、diathesisの理論にとって最も受け入れられ得るものは、例えば、主体(subject), 反動作主(counter-agent), 客体(object), 受信者(addressee), 手段(means), 道具(instrument)等々のような役割(合わせて25の役割)であるとしている⁹。

次に、Khrakovsky(1979)でいう意味論的、統辞論的関係を現代英語の‘chase(追う)’を例にして示すことにする。

現代英語における動詞の分類を行っている Levin(1993:270)は、‘chase’は典型的に他動詞で、主体としての追う人と客体としての追われる人を持つと規定しているので、Khrakovsky(1979)の見解によって、その動詞は、2つの項を持ち、その項にそれぞれ主体、客体という意味論的役割が与えられ、それに伴う主語、目的語という統辞論的機能が与えられるということになる。

Levin(1993:269)における‘chase’に関する例文には次のものがある。

Jackie chased the thief. ‘ジャッキーはその泥棒を追った.’

この例文において、意味論的には‘Jackie’が主体、‘the thief’が客体であり、統辞論的には‘Jackie’が主語、‘the thief’が目的語である。これに加えて Khrakovsky(1979)で言う意味論的階層と統辞論的階層はそれぞれ 1 = 主体, 2 = 客体, 1 = 主語, 2 = 目的語と順序づけて示されることになる。

ところで、Khrakovsky(1979)によれば、先の事実は次のように図にして示すことができるとされている¹⁰。

	‘chase’	
意味論的役割	1 = 主体	2 = 客体
統辞論的機能	1 = 主語	2 = 目的語

図 2. 動詞 ‘chase’ の diathesis

一方、図 2 の基本 diathesis に対して、派生 diathesis はどうなっているだろうか。

‘Jackie chased the thief.’ の受動文は ‘The thief was chased by Jackie’ となり、

その diathesis は次のように図によって示される。

	‘be + chased’	
意味論的役割	2 = 客体	1 = 主体
統辞論的機能	1 = 主語	3 = その他

図3. 図1の派生 diathesis

Khrakovsky(1979)で提示された diathesis の理論は、視覚的に動詞の派生関係を確認できるという点で、他の理論よりも優れた所だと言い得るが一方、全ての言語にこのような理論が適用できるかについては、疑問の余地があると言い得る。

2.3. Perlmutter&Rosen(1984)について

Perlmutter&Rosen(1984)では、関係文法(relational grammar)を提示している。この文法は、Trask(1993:236)において、主語、直接目的語、間接目的語を原素的なものに見做し、ありふれた種類の構成要素の構造に何の重要性も割り当てないという点で他の文法の接近法と異なり、これら3つの関係がそれぞれ1, 2, 3という項によって区別されるとされている。この理論は、diathesis の理論と同じように、図によって示すことができ、その図は、鷲尾龍一(1997:53-54)においても示されている。この理論も、diathesis の理論と同じく、視覚的に動詞の派生関係を確認できるという点が、他の理論よりも優れた所だと言い得るが一方、全ての言語にこのような理論が適用できるかについては、疑問の余地があると言い得る。

2.4. Klaiman(1991)について

Klaiman(1991)では、意味論的にヴォイスという文法範疇を3つのタイプに分けている。そのヴォイスという文法範疇における3つのタイプには、動詞にヴォイスに関するマーキングがない能動(active)や中動(middle)を含む基本ヴォイスタイプ(basic voice type)、動詞にヴォイスに関するマーキングがある受動(passive)と反受動(antipassive)を含む派生ヴォイスタイプ(derived voice type)、動詞にヴォイスに関するマーキングがあるものの、存在論的卓立性(ontological salience)によって指示されることが大きい語用論的ヴォイスタイプ(pragmatic voice type)があるとしている。

また、Klaiman(1991:171-175)においては世界の様々な言語と共に、現代朝鮮語の考察も行なわれており、これを語用論的ヴォイスタイプのうちの逆行ヴォイス(inverse voice)に分類している。ここでいう逆行ヴォイスとは、文上に示された動作が存在論的に低い卓立性のある関与者(participant)から存在論的に高い卓立性のある関与者に進む時、動詞が動詞の語根の特別なマーキングを通して文法化される方法でマークされるものとされている。

Klaiman(1991:120)は、存在論的卓立性の尺度として次のような図を示している¹¹。

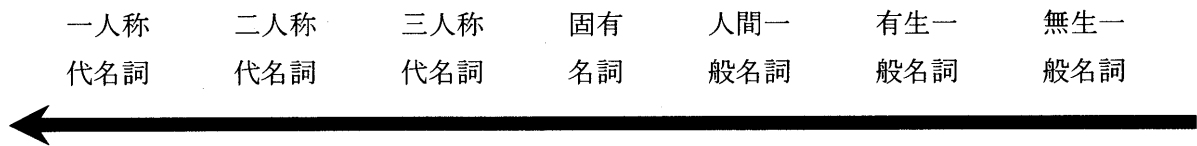


図 4. 存在論的卓立性の尺度

つまり上の図によれば，一人称代名詞が存在論的に高い卓立性を持ち，無生一般名詞が存在論的に低い卓立性を持つということになる¹²。次に紹介する Givón(1994)を含めて，Klaiman(1991)は，ヴォイスを語用論的，認知論的観点まで拡大して，考察した点で，他の研究を様々な点で凌駕していると言える。

2.5. Givón(1994)について

Givón(1994)に関する議論は，浜之上幸・朴敬玉・崔昌玉(2000:433-434)に基づき，概観することにする。

ヴォイスを動詞の文法範疇に関する議論にのみ限定せず，機能的かつ類型論的な議論まで拡大する Givón(1994:8-9)では，意味論的に他動的な出来事(semanticallly-transitive event)における動作主(agent)と受動者(patient)の相対的な主題性(relative topicality)の違いという観点から，4つの主要なヴォイスを以下のように規定している。

ヴォイス	相対的な主題性
能動／順行(active/direct)	動作主＞受動者
逆行(inverse)	動作主＜受動者
受動(passive)	動作主＜＜受動者
反受動(antipassive)	動作主＞＞受動者

能動／順行ヴォイス：動作主が受動者よりも主題化されているが，受動者もかなりの主題性を持っている。

逆行ヴォイス：受動者が動作主よりも主題化されているが，動作主もかなりの主題性を持っている。

受動ヴォイス：受動者が主題化され，動作主が極端に非主題化される。

反受動ヴォイス：動作主が主題化され，受動者が極端に非主題化される。

以上のように，機能的，類型論的に考えた場合のヴォイスは，動作主と受動者の相対的な主題性のちがいから規定される。しかしながら，話し手が動作主と受動者のどちらに大きな主題性を与えるかについては，全くの恣意的な判断に基づいているわけではなく，主題化されうる対象に何らかの限定があると考えられる。

逆行ヴォイスに議論を限定してみると，Givón(1994:22-23)は，9個のパラメータからなる“類的な主題の階層(generic topic hierarchies)”に基づいて，2種類の逆行ヴォイス

を規定している。

類的な主題の階層

- a. 談話の参加者： 話し手>聞き手>第三者
- b. 有生性： 人間>有生物>無生物
- c. 動作主性： 動作主>授与者>受動者
- d. 性： 男性>女性
- e. 年齢： 大人>子供
- f. 大きさ： 大>小
- g. 所有関係： 所有者>被所有者
- h. 限定性： 定>不定
- i. 照応性： 代名詞>完全名詞句

1. 語用論的逆行(pragmatic inverse)

動作主が受動者よりもより主題化される場合には、能動／順行ヴォイスが用いられ、受動者がより動作主よりも主題化される場合には、逆行ヴォイスが用いられる。

ここで、動作主と受動者の相対的な主題性の違いは、テキストの流れの中で話し手が任意な(optional)選択を行うことによる。換言すれば、能動／順行ヴォイスと逆行ヴォイスのどちらを選ぶかは、話し手の判断にゆだねられている。

2. 意味論的逆行(semantic inverse)

類的な主題の階層において、動作主が受動者よりも上位にランクされる場合には、能動／順行ヴォイスが用いられ、受動者が動作主よりも上位にランクされる場合には、逆行ヴォイスが用いられる。

ここで、動作主と受動者の相対的な主題性の違いは、類的な主題の階層において規定されており、話し手の判断が介入する余地がない。つまり、能動／順行ヴォイスと逆行ヴォイスのどちらが選ばれるかは、話し手にとって強制的な(obligatory)選択なのである。

このように Givón(1994)のヴォイス理論は、認知論的な観点を付け加えたという点で、今までの先行研究で解決できなかった点も克服する、秀れた理論であると言い得る。

3. ヴォイスと他の範疇との関係

言語類型論的に、ヴォイスとアスペクトが何らかの相関関係を持つことは、様々な論文で、言及されてきた。しかしながら、現代朝鮮語においても、ヴォイスとアスペクトにおいて相関関係があるかについては、まだ、明らかになっておらず、これについては、今後の課題であると言い得る。

4. 今後の課題

今後の課題は、本稿で概観した先行研究を基に、現代朝鮮語のヴォイスを記述すること

である。

(ちえ・ちゃんおく 本研究科博士後期課程)

註

¹ 本稿で、様々の言語学術語辞典のうち、特に Trask(1993)を概観するのは、次のような理由からである。この辞典は、1)言語学における術語を包括的に取り扱っており、2)その術語を分かりやすく、簡単に説明し、3)その術語がどの文献で初めて使用されたかについても言及しているからである。ただし、術語の特性によっては、Trask(1993)の規定だけでは、説明が行き届いていない部分があることは、否定できない。本稿では、そのような時は、Asher(1994)、亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)も参考しながら、ヴォイスの規定に接近している。

² *adjutative* という術語について、正式な日本語の訳語は、まだないようである。ちなみに、Trask(1993:9)では、この *adjutative* を、動作の主体が他の誰かに何かをするように手伝わせることを示す、動詞の屈折形式とし、その例としては、ティグリニヤ語の *ʔaqqatāle* ‘he helped to kill’ (*qātāle* ‘he killed’) があるとする。また、この *adjutative* はそれが現れる、諸語において、ヴォイス体系の一部を形成するとしている。

³ 現代朝鮮語のヴォイスについては、菅野裕臣(1982)の説明が詳しい。そこでは、現代朝鮮語において動詞をヴォイス的に派生する方法として、1)ヴォイス接尾辞、2)擬似接尾辞、3)分析的な形があるとしている。ここで例として提示した ‘*웃긴다*’ (追われる)は、1)のヴォイス接尾辞によって、他動詞から受身形に派生したものである。

⁴ ここでは、ヨーロッパ諸語等で観察される、無人称文(*impersonal construction*)は除外して、考察することにする。

⁵ 項とは、亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996:1232)によれば、もともとは論理学で使われた術語であるが、変形文法やそれとかかわりの深い言語理論において、特別な意味で使われるとし、文の中の動作や状態を表わす実述または述語(*predicate*)と対立して、その動作や状態と何らかの関係をもつ1つあるいは2つ以上の実体をあらわすものだとなっている。

⁶ ここで、Geniušienė(1987)における意味論的役割を概観するのは、レニングラード学派の方法論に従って、規定されているからである。レニングラード学派は、世界の言語のヴォイスを類型論的に考察する時に、今まで使用されていたヴォイスの定義では、それらのヴォイスを記述できないと考え、機能＝意味論的範疇としての *diathesis* を設定する。これについては、次の 2.2 を参照せよ。Geniušienė(1987)では、意味論的役割が多ければ、多いほど、それによって記述されたものは、客観性を著しく欠如すると言及しているものの、Geniušienė(1987)において、ある程度の意味論的役割を規定しているところを鑑みれば、これらの規定を抜きにした議論は、ヴォイスには、存在しないことがわかる。

⁷ 本稿では、動詞に内在的な意味論的役割の種類と量を持つという議論や、動詞が幾つの項をとるかという議論を客観性の欠いたものとして認めている。というのも、実際の用例

を考察すると、主語や目的語が存在しない文が多くあるからである。ただし、予めある動詞が幾つの項をとるか把握し、実際の用例を考察することには異論がない。

⁸ 本稿では、Khrakovsky(1979)にならって、統辞論的機能を示す数字を1が主語、2が目的語、3がそれ以外を示すものとする。

⁹ 通常、能動文や受動文を意味論的に考察する場合、動作主(agent)や受動者(patient)といった意味論的役割が使われるが、Khrakovsky(1979)において、その名称の代わりに、主体と客体が使われている。これは、ただの名称の違いに過ぎないと思われるので、本稿では、主体、客体という名称を採用して、議論を進めることにする。

¹⁰ Khrakovsky(1979:299)によれば、「意味論的可変物 A, B, C, D, ... の階層的に順序づけられたセットと理論的に限定されないセットを diathesis の分類表の確立のために必要な一番に重要な対象物と見なす」とされている。それ故、diathesis を図にして示す時、統辞論的な機能が上位に示された次の図はあり得ない。

1 = 主語	2 = 目的語
1 = 主体	2 = 客体

また、Khrakovsky(1979)では、受動文や使役文などに派生する前の文を基本文と呼び、 Δ_0 と表記している。またその基本文から派生した受動文や使役文などを $\Delta_{1,2,3...}$ と表記している。それに加えて、Khrakovsky(1979)では、 Δ_0 のような文と Δ_0 から派生した文を図で示している。例えば、Khrakovsky(1979)に従い、“AがBを～する”という基本文は次のような図で示すことができる。

Δ_0 :

	動詞 ‘～する’	
意味論的役割	1 = 主体	2 = 客体
統辞論的機能	1 = 主語	2 = 目的語

一方、この基本文から派生した“BがAに～される”という受動文は上と同様に次のような図で示すことができる。

Δ_1 :

	動詞 ‘～される’	
意味論的役割	2 = 客体	1 = 主体
統辞論的機能	1 = 主語	3 = それ以外

以上の図からそれぞれの機能の階層が移動し、 Δ_0 と Δ_1 の違いをなしていることがはつき

りとわかる. 本稿でも, この Khrakovsky(1979)の見解に従い, diathesis を図によって示すことにする.

¹¹ Klaiman(1991:119)によれば, この図は Dixon(1979:85)において, 最初に示されたものであるとしている.

¹² Klaiman(1991)において提示された現代朝鮮語の考察については, 浜之上幸・朴敬玉・崔昌玉(2000:452-454)を参照せよ.

参考文献

- 서울대학교 大學院 國語研究會 (1990)『國語研究 어디까지 왔나』서울:東亞出版社, 493-510.
- 서정수 (1996)『국어문법』서울:한양대학교출판원, 643-653, 1075-1084.
- 이상억 (1999)『국어의 사동·피동구문 연구』서울:집문당.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1996)『言語学大辞典 第6巻 [術語編]』東京:三省堂.
- 菅野裕臣 (1981)『朝鮮語の入門』東京:白水社, 111, 143, 208-209, 242.
- (1982)「朝鮮語(ヴォイス)」『講座日本語学 10』東京:明治書院, 280-291.
- (1987),「中級講座」『基礎ハングル』11号, 東京:三修社, 61-67.
- 工藤真由美 (1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学 4』東京:むぎ書房, 47-102.
- 国立国語研究所編 (1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』東京:三省堂.
- 崔昌玉 (2002)「現代朝鮮語におけるヴォイス接尾辞を取り得る動詞について—統辞論的, 意味論的観点からの一考察—」『ユーラシア言語文化論集』5 千葉:千葉大学ユーラシア言語文化論講座.
- 佐藤里美 (1986)「使役構造の文—人間の人間にたいするはたらきかけを表現する場合—」『ことばの科学 1』東京:むぎ書房, 89-179.
- (1990)「使役構造の文(2)—因果関係を表現するばあい—」『ことばの科学 4』東京:むぎ書房, 103-157.
- 須賀一好・早津恵美子 (1995)『動詞の自他』東京:ひつじ書房.
- 仁田義雄 (1991)『日本語のヴォイスと他動性』東京:くろしお出版.
- 浜之上幸 (1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』138 天理:朝鮮学会.
- (1992)「現代朝鮮語の「結果相」=状態パーフェクト—動作パーフェクトとの対比を中心に—」『朝鮮学報』142 天理:朝鮮学会.
- 浜之上幸・朴敬玉・崔昌玉 (2000)「現代朝鮮語のヴォイスと INVERSE 性について」『平成 12 年 COE 形成基礎研究費研究成果報告(4)』千葉:神田外語大学.
- 村上三寿 (1986)「うけみ構造の文」『ことばの科学 1』東京:むぎ書房.
- 村上三寿 (1997)「うけみ構造の文の意味的なタイプ」『ことばの科学 8』東京:むぎ書房.
- 村木新次郎 (1991)『日本語動詞の諸相』東京:ひつじ書房.
- 鷲尾龍一 (1997)「比較文法論の試み—ヴォイスの問題を中心に—」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』東京:三修社, 1-66.

- Asher, R.E. (1994) *The encyclopedia of language and linguistics*, Oxford, New York, Seoul, Tokyo:Pergamon Press.
- Babby, L.H. (1976) Review of Xolodovič(ed.) (1974), *Language* 52.3:698-701.
- Comrie, B. and Polinsky, M (eds.) (1993) *Causatives and transitivity*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins.
- Dixon, R.M.W. (1979) *Ergativity*, *Language* 55:59-138.
- Geniušienė, Ė.S. (1987) The typology of reflexives Mouton de Gruyter:Berlin, New York, Amsterdam, 39-42.
- Givón, T. (1994) The pragmatics of de-transitive voice: Functional and typological aspects of Inversion, In T. Givón(ed.) (1994), 1-44.
- Givón, T. (ed.) (1994) *Voice and inversion*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins.
- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations*, Chicago:The University of Chicago Press.
- Kemmer, S. (1993) *The middle voice*, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins.
- Khrakovskij, V.S. (1979) Diathesis, *Acta Linguistica Academia Scintiarum Hungaricae* 29:289-308.
- Klaiman, M.H. (1991) *Grammatical voice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mel'čuk, I.A. (1988) *Dependency syntax*, New York: State university of New York.
- Mel'čuk, I.A. (1993) The inflectional category of voice: towards a more rigorous definition, In B.Comrie and M. Polinsky(eds.), 1-46.
- Nedjalkov, V.P. and V.P. Litvinov. (1995) The St Petersburg/Leningrad Typology Grop, In Shibatani, M and T. Bynon (eds.) (1995), 215-271.
- Perlmutter, D.M. and C. Rosen(eds) (1984) *Studies in Relational Grammar 2*, Chicago: University of Chicago Press.
- Shibatani, M. (1976) The grammar of causative constructions:a conspectus, *Syntax and Semantics*, Vol. 6, New York:Academic Press.
- _____ (1985) Passive and related constructions:A Prototype analysis, *Language* 61.4:821-848.
- Shibatani, M and T. Bynon (eds.) (1995) *Approches to language typology*, Oxford:Oxford University Press.
- Trask, R.L. (1993) *A dictionary of grammatical terms in linguistics*, London and New York: Routledge, .
- Xolodovič, A.A. (1969) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij:morfologičeskij kauzativ*, Leningrad:Nauka.
- Xolodovič, A.A. (1974), *Tipologija passivnyx konstrukcij:diatezy i zalogy*, Leningrad:Nauka.